

ひょうご 水百景

No.24-1 船場川（姫路市船場・城西地区）

～姫路の発展を支えた城下一飾磨津間の舟運～

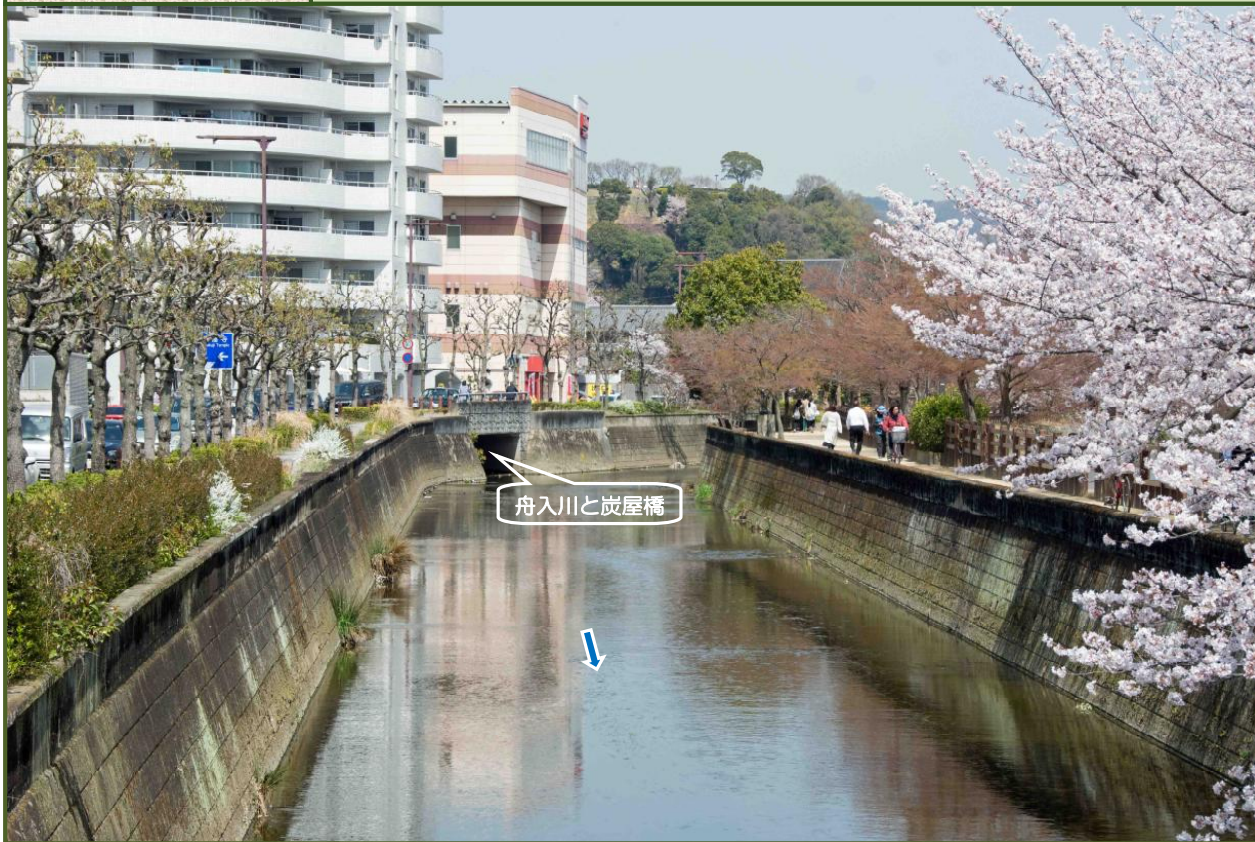


写真-1 車門橋から船場川上流を撮影（平成30年3月）

■ 姫路城主は池田家から本多家へ

池田家が鳥取に移った後、姫路に入ったのは「徳川四天王」のひとり・本多忠勝の長男で桑名城主だった本多忠政です。父の代から東海の要衝の地・桑名にあって、大坂冬の陣の後、濠の埋立を取り仕切ったのが忠政で、外濠だけという和睦の条件を無視して内濠まで埋めてしまったとか。

元和3（1617）年7月姫路入りした忠政は、嫡男・忠刻（ただとき）と千姫のために西の丸を造営するとともに向屋敷や西御屋敷（現・好古園）、東御屋敷などを建て、姫路城の完成度を高めていきました。

池田輝政の町割りによって、姫路城下・外曲輪に88の町（横山忠雄『城下町姫路の地名』によると、88は吉数を表したもので、実際には78町だったとか）がつくられ、およそ二千軒の本家が集まり大城下町が形成されていた姫路は、本多家の時代になって本家二千四百軒余り、人口二万二千人余りへとさらに発展していきました。大城下町の物流も活発になり、そのためのインフラ整備も進みました。

■ 本多忠政、船場川を改修し舟運を開く

忠政が次に手掛けたのは、飾磨津と城下を結ぶ舟運です。飾磨津と姫路城清水門との間、一里（約4km）余りに舟運を開く計画を立て、実施奉行に白国少太夫を任命、二股川の一流である妹背川（いもせがわ）、三和川を拡幅・浚渫し、舟着場を設置するとともに、横手村に飾磨樋門を設けて市川の水を取り入れ、舟運を開きました。この改修によって重要な物流ルートに変貌した川は、この頃から「船場川」と称するようになりました。

材木町地先の船場川右岸には、「船場川の碑」（写真-2）が建立されています。串団子のような形をしています。団子の部分および台座の石は恐らく亀山石だと思われます。

飾磨津から直接高瀬舟や筏が姫路城下に着くようになると船着場周辺はたちまち市をなし大いに賑わいました。高瀬舟は、風のあるときは帆をあげて川を上り、風のないときは福中橋あたりまでは竿を用い、そこから上流は川岸か

ら人力で曳かれて上がったそうです。

上るときには、干魚・塩・雑貨などを積み、下るときには米・木綿・薪炭などを運んでいます。そして、姫路城西の車門より上流の川沿いには藩の物資を扱う商家が立ち並んでいました。舟運が開かれる以前、材木屋は龍野町・堺町・竹田町・生野町・橋元町など城下各地に散在して火事や通行の障害となっていました。舟運が開かれたのを機に荷捌きの効率化を図るため船着場周辺に集められ、ここに「材木町」がつけられました。

下記は、台座前の石板に記された「船場川の由来」です。

昔その名もゆかし
い妹背川も江戸時代
には姫路城下町の繁
栄にと船着場を造り
貨客運輸用の大工事
をして船場川と名づ
けられた。
以後約三百年間高
瀬舟が時には綱で曳
きあるいは帆をあげ
て飾磨港との間を盛
んに往来し、このあた
りが船場の中心とし
て賑わった。ここに
ありし昔をしのび由来
を残す次第である。
昭和四十八年秋

船場川



写真-2 船場川の碑

■ 船場川に舟運が開かれたのはいつ？

清水門外の船場川左岸部に傷みの激しい石碑(写真-3)があります。恐らくこの石も竜山石だと思われませんが、石の表面は風化が激しく字が刻まれていることすらわからない状態です。加えて説明板もないので、通りがかりの観光客も「これ、何の碑やろ。」と言いながら通り過ぎて行きます。

判読できないため諸説ありますが、元禄8(1695)年の材木町材木屋口上書に「末世の御印として、清水門外に石柱…」とあるので寛永元(1624)年頃、忠政の船場川改修工事竣工を記念して清水門外の河畔に建立された石碑との説が有力だそうです。

一方『姫路市史・第三巻』では、「この普請は元和七(1621)年に成就し、九月には本多忠政は車門から船場川を船で飾磨大樋まで下り、完成を視察し遊覧した。」とあります。ここで引掛かるのは、「飾磨大樋まで下った」ことと、船場川改修工事竣工の時期が異なることです。

前者については、市川との分流部に忠政が設けた大樋が「飾磨樋門」の通称なので、城からは上っていく必要があります。でも視察するべきは飾磨津までの航路なので、ここは「飾磨大樋」が誤りで、船場川から宮堀川へ水を流すために設けた「堰」を指しているのではないのでしょうか。

後者の竣工の時期については、『姫路謂レ記』に、「河を城の西に開き掘て舟の通路となし船場川と名付く、橋五つを掛け、人之往来を休め市町を構賑す、其内に市ノ橋と云あり、此橋上下材木町・小利木町の市場をなす故、橋の名とす。」と記しています。流れから言うと、まず船場川を開削して飾磨津までの舟路を確保し、その後順次橋を架けていったと考えれば、舟路竣工が元和7(1621)年、橋を含めた全工事の竣工が寛永(1624)元年ということになりますが、約3年のタイムラグはちと長いですね。



写真-3 船場川改修記念碑

■ 船場川舟運の起点・市川との分流点に設けられた飾磨樋門

姫路市保城(ほうしろ)にある「飾磨樋門」の取水口が二級河川・船場川の起点です。本多忠政の時代に築造されたこの樋門は、高瀬舟を通すために必要な水量を船場川に流すとともに、洪水時は門扉を閉めて姫路城下を守るという極めて重要な施設だったので、その操作には多大な苦勞があったようです。

明治時代末期に強固な樋門と門扉の開閉機が設置され、維持管理はすいぶん楽になったそうで、堤防上には、功績のあった飾磨堰水利組合土功会委員長・中安繁治翁を顕彰する石碑が建立されています。



写真-4 船場川の上流端にある飾磨樋門

■ 材木町周辺に残る舟運の名残り

材木町周辺には、船場川舟運の名残りがいくつか残っているので紹介します。

(1) 舟入川跡

船場川右岸沿いの産業道路から見星寺に入る所に『史跡 舟入川之跡』と刻まれた石柱が建っていて、石柱の周り三面には右下の文字が刻まれています。

舟入川は、飾磨津と清水門の間を上り下りする高瀬舟が交替するための停泊場であり積荷場で、明治初期までは水深も相当あったとか。



写真-5 炭屋橋から舟入川を撮影



写真-6 石柱

史跡 舟入川之跡

此ノ舟入川ハ寛永元年（西暦一六二四年）頃姫路城主本多美濃守忠政ガ船場川ヲ改修サレタ時飾磨津ト清水門ノ間ヲ上リ下リスル高瀬船ガ交替スルタメノ碛泊及ビ積荷場ヲ明治初年迄ハ水深モ相當アリ然モ橋脚ノ高イ炭屋橋ト称スル立派ナ木橋ガ架セラレテイタ 其後永ラク総石造リノ時代ヲ経テ昭和三十六年市土木課ニヨリ長サ四米突ニ縮メテ現在ノ如クサレタ又之西約二十米突ハ石垣ガ斜ニナツテ残ッテイルノハ荷下シニ便シタノデアル又此ノ船便ニヨリ船場地方一帯ハ相當賑ッタモノデア

昭和三十七年十一月建立

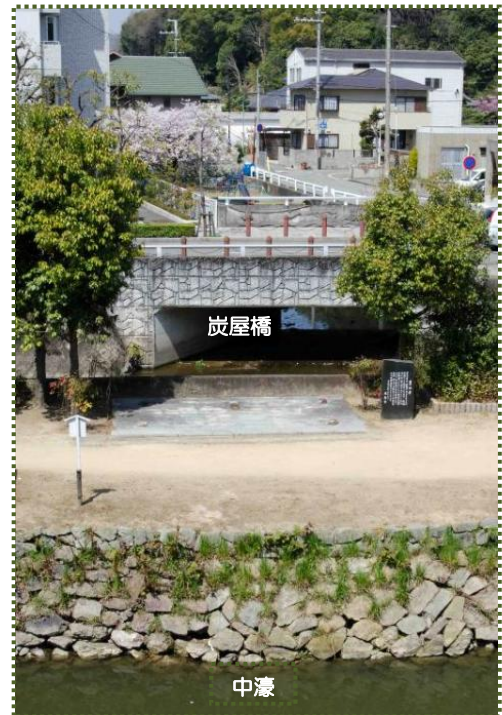


写真-8 姫路城中瀬沿いの土壘上から中瀬・船場川越しに炭屋橋および舟入川を撮影



写真-7 炭屋橋の高欄に描かれた高瀬舟（左端に旧炭屋橋の親柱）

舟入川に架かる炭屋橋の高欄には、往時を偲んで高瀬舟が描かれています（写真-6）。漕ぎ手は3人、積み荷の米俵は、川を下って飾磨津まで運ばれます。『姫路市史・第三巻』によると、「この港は水深が浅いために西廻りの千石船は入港できないことから、飾磨船という小船によって大坂などへ物資の輸送をしていた」とあります。

小船で明石海峡を越えて大坂まで行くのはさすがに無謀です。ここは、「…千石船は入港できないことから、飾磨船という小船に一旦積み替えて沖で待つ千石船まで運び、そこで再度積み替えて大坂などへ物資の輸送をしていた」とするところを少々文章を端折り過ぎたように思います。

(2) 船繋ぎ岩

船場・城西地区内を東西に貫く旧西国街道は、江戸時代参勤交代の要路でした。この道が船場川に突き当たるT字路近くの民家の庭に、かつて船場川岸にあって船を繋いだという巨石「船繋ぎ岩」が庭石として置かれています(写真-8)。民家の塀には下記のような説明があります。

船場川船繋ぎ岩
元和三年(一六一七)姫路城主となつた本多忠政の時代、船場川の整備によつて城下と飾磨津の舟運が開かれた。これにより材木町から大蔵前まで川西一帯に町場が発達し姫路の経済の中心となった。この船繋ぎ岩は重要な水上交通路であつた船場川を行き交う船の荷揚げ、積み荷の船止めの役割を果たしていたもの。船場川堤にあつた船繋ぎ岩は役割を終え庭石に転用されている。この地は秀吉時代以来の町である龍野町で江戸時代には「せんざき屋」という大商家があつた。
平成一七年三月
姫路市教育委員会



写真-9 『船繋ぎ岩』

(3) 舟着場跡

高瀬舟は、上流は保城を通り市川まで、下流は飾磨津(現・姫路港)を往復していて、船場川には多くの舟着場がありました。特に、材木町から小利木町あたりの舟着場では市が開かれて大いに賑わったことから、そこに架かる橋に「市之橋」の名がついたといわれています。

現在残っている舟着場は、八代本町2丁目のものだけです(写真-10)。ちょっと勾配がきつそうです。



写真-10 八代本町に残る舟着場跡



写真-11 常夜燈

(4) 燈籠

将軍橋近くの千代田公園には、舟運の目標となった燈籠(常夜燈)(右上の写真-10)があります。夜、薄暗くなつても高瀬舟は運行していたのでしょうか。正面には「常燈」と刻まれています。

■ 千姫の小径

本多忠政の嫡男・忠刻に嫁いだのが第二代将軍・徳川秀忠の娘・千姫(大坂夏の陣で自害して果てた豊臣秀頼の正室)です。忠刻と千姫が暮らした西の丸の西側には、船場川とそれと併行して内濠・中濠があり、それらを分ける堤を「千姫の小径」と呼んでいます。(No.23「船場川」の写真-1参照)

また、市之橋直下の船場川右岸には千姫の銅像(写真-11)があり、清水門近くの船場川左岸には忠刻と千姫の歌碑が建立されています。

この歌は、千姫(1597~1666年)が、元和5(1619)年に父・徳川秀忠から大安宅船(おあだけふね)を預けられたことを記念し、一家一族の繁栄を祈願するため、8月14日の待宵(まつよい:翌日の十五夜の月を待つ宵の意)に月見かたがた「船」の題で歌会を催した時の連歌の一部で、千姫が姫路で残した唯一の歌といわれています。

※1 大安宅船:中近世の日本の軍船のうち大型のものを指し、大きいものは長さ50m以上、幅10m以上の巨体を誇る。



写真-12 千姫の小径

初秋の風を簾にまきとりて

軒はにおほふ 竹の葉の露

忠刻・お千



写真-13 忠刻・千姫の歌碑

■ モノローグ

船場・城西地区は旧西国街道沿いに発達してきたところで、船場川の舟運が盛になると川沿いに多くの商家が軒を連ね、ずいぶん賑わったそうですが、平成 13 (2001) 年 11 月、日赤病院が国道 2 号・夢前橋の東に移転してからは人通りがめっきり少なくなってしまいました。



図-1 姫路城の西を流れる船場川周辺の地図

とはいうものの龍野町界隈は、昭和 20 (1945) 年 7 月の姫路大空襲の際も焼失を免れ、江戸時代の面影が残されています。姫路城に行かれる時は少し西に足をのばして、うだつのある家や格子窓のある家など町屋の風情を楽しみながら散策してはいかがでしょうか。

ところで、過日船場川に沿って歩いていると八代町で面白い橋を見つけました。親柱に記された橋名は、誰が名づけたのか「酒飲橋 (さけのみばし)」(写真-14・15)。どなたか橋名の由来をご存じの方、教えてください。

ほかにも「亀の甲橋」という名の橋があります。

この橋は、国道 2 号・白鷺橋の下流約 400m のところに架かっている橋(図-1 参照)で、近くに本多忠政の設計に基づいたという亀の甲堰があったそうです。船場川に割石で亀の甲形の堰を築いて水位を上げ、備前門から外堀となった東側の堀に水を送る役目をしたと考えられています。高瀬舟が通るので、船通しはあったんでしょうね。



写真-14 船場川に架かる酒飲橋の親柱



写真-15 「さけのみばし」です。

【参考資料】

- 1 『姫路市史・第三巻本編 近世 I』 姫路市 平成 3 年 3 月
- 2 『姫路市史・第十四巻 別編 姫路城』 姫路市 昭和 63 年 7 月
- 3 『船場川再発見』 姫路土木事務所 PR チーム 平成 15 年
- 4 『船場川の流れ』 柳沢 忠 昭和 57 年 8 月
- 5 『文化財をたずねて～船場めぐり(船場・城西地区)』 姫路市教育委員会 平成 28 年 3 月
<https://www.city.himeji.lg.jp/kanko/cmsfiles/contents/0000002/2162/senba.pdf>
- 6 『船場川』 HAGA-PEDIA <https://haga-pedia.net/%E8%88%B9%E5%A0%B4%E5%B7%9D/>
- 7 『船場川、本多忠政、千姫』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 25 (2013) 年 5 月 『ひょうご水百景』 No.24

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.24